

# 哲学研究

第五百十七号

第四十七卷  
第十七册

## 第三の論理

山内得立

### 序章

#### 一

プロクリスによってのみ伝え残された、パルメニデスの断片に次のような語句がある——「私がどこから始めるべきかということは私にとってどうでもよいことである。なぜなら私はやがてまたそこへ還ってくるであろうから」(Ἐπισημαίνω δὲ τοῦτο, ἀρχήν ἀποσώζουσι τὸν γὰρ πάλιν ἵεσθαι αὐτοῦ, Proclus in Parm. 708, 16-17)。この言葉はこれからこの論究を始めようとする我々にとっても甚だ都合のよい語ではあるが、それに先たちパルメニデスにとってこれほどよく彼の思想の出發をのみでなく、彼の哲学の全体を表示するものはないことを語らねばならぬであろう。パルメニデスにとっては彼の出發点はやがては彼の帰り来るべき終着点でもあった、どこから始めてもよいとは出鱈目にといふのではなく、どこから初めてもつまりはそこへ帰着すべく定められているが故にいうことである。それほど

に彼はものを全体として見ようとする人であった。事物を、その様々な容相に於いてではなく、その根本的な本態に於いて、その移りゆく種々相についてではなく、その変らざる実体に於いて把握せんとする人であった。彼にとって世の様々な容態はドクサの世界にすぎぬ、学問の志すところのロゴスの世界でないのみでなく、世の常の様態を語ろうとするエポスの世界でさえもなかった。前五世紀のアルカイック時代に於いて彼ほど徹底した事物の探求者即ち哲学者の名に値する人は稀れであるといわねばならぬであらう。

しかしパルメニデスがそれほどの覚悟をもって語ろうとしたところのものは果して何であったか。人によってはこの断片は円についていったものであり、円のどの点をとってもそれは出発であると同時に帰着点でもあることを意味したものであると言うが、(Patin; Parmenides im Kampf gegen Heraklit, Jahrb. f. class. Philolog 25 Suppl. S. 56.) プロクルスはこの断片をデュルスの断片集八ノ二五及び八ノ四四と共に引用しているから、これは一なるものの概念の外に就中存在の概念に関係し、理性的なる諸世界 (τὸ εἰσὸς τῶν νοητῶν) を意味したものであると考えられねばならぬ。たとえプロクルスが意識的にそうしたものとして引用したのではないとしてもパルメニデスがそこから出発しそこに還えるべきものは「存在」であり乃至は存在の概念であるより外にはないことをもの語っている。なぜなら事物は何ものでもあれ、何らかの有るものとしてとにかく先ず存在しそして事物が何ものかであり如何に転変するとしても遂に何らかの存在としてあらねばならぬからである。それ故に我々は「存在がある」ということを言いそして考えねばならぬ」(ἄπὸ τοῦ ἔχοντος τοῦ οὐκ ἔχοντος, Frag. VI, 1)。「なぜなら存在は存在し非存在は存在しないのであるから」。「このことをよく熟考するように私は汝に命ずる。それが汝に警告する、研究の第一の道であるのであるから」。人間は二つの頭をもち (διπλοκεφαλίαν) それ故に迷う。迷える心をその胸にもつが故に人間は聾となり盲目であり判断を失ったやからとなり、存在と非存在とを同一視する者共に墮する、そのような者共にとっては凡てのものに於いてさかしまな道しか残されていない——人々はこのような研究の道から心して遠ざかるべきである。

パルメニデスにとつてはそれ故に研究の道はただ一つしかない、女神に導かれて真理の門の戸口に達したとき、そこにはただ一つの門が開かれ、他の一つは固く閉ざされていた。開かれた門は存在が存在するという一筋の道に通じ、進むも退くもこの途より外にはなかった。存在しないものが存在することは不可能であるのみでなく、考えることもできない。なぜならそれについて考えるということには考えらるべきものが先ず存在しなければならぬからである。そこからして「考える」ということと「それについて考えるもの」の存在とは「一つの事の事がらびである」(*caûrôn g'êarî vocêu te kâi ôbêkeu êrti vônyia*, Frag. VIII, 34) という有名な断片が我々に残されている。しかしこの語句については古来種々な解釈があり、語学的にも正鵠をうることは頗る困難のようである。先ず古くはシムプリキウスの注(Simplicius, Phys. 87, 17-18) があって「考える」ということと「それが目やすところのものとは同一である」(*caûrôn ôs êrtêu tôû ôrtos, êrti tô vocêu têlos ôu aûrtou*) という解釈に倣って、ディルスは「思惟とその目的とは一つである」(Denken und des Gedankens Ziel ist eins, Diels, Die Fragmente der Vorsokratiker Band, I, S. 157) と訳した。しかしこの独訳も頗る難解であり、第一に關係代名詞 *ôbêkeu* を *tô ôi êbêka* と同一視してよいかどうかが問題であろう。タランはそれを次の点から批判している (Taran; Parmenides, p. 128)。*ôbêkeu* を *tô ôi êbêka* と同一に読むことはシムプリキウスの新プラトン主義的な解釈であって必ずしもパルメニデスの真意を得たものではない。ディルスは存在を思惟の目的と訳しているが、これは思惟の目やすところのものというほどの意味であるとしても存在は必ずしも思惟の目的ではなく、むしろその原因でなければならぬ。*ôbêka* はホメロスに於てもそうであつたように (Chantraine, Grammaire Homérique, II, p. 290-291) *ôi* と *êti* と同様に読むべきであり、従つてこの断片は「考える」ということと「思う」の思惟が存在することと同一である」と解すべきである。しかしそのように解釈するとそれは専ら思惟の存在を主張するものとなり、考えることと考えるという事実と同一であるという自明の理を言表わしたものにすぎなくなるであろう。これはパルメニデスにとつても余りにトリヴィアルな解釈であるといわ

ねばなるまい。obscuro を *scire* と同意語にとることが許されるとしてもそれは単なる *that* ではなくそれ以上の何もなかでなければならぬ。タランはこの断片を *To think is equivalent to thinking that the object of thought exists* (op. cit. p. 123) と訳しているが、その意は次の如くであろう。パルメニデスのいう「思惟」とは考えるという事実の存在を意味するのではなくそれについて考えるところのもの、即ち思惟の対象の存在をいうのである。考えるというのは考えるという事実のあることであり、考えることはたしかに一つの存在であるが、この点から思惟と存在との一致を云為するのは余りにおとなげないことである。パルメニデスの言わんとする所は考えることとそれについて考える対象の存在とが一であることであって、考えるという作用の存在ではない。それ故にこそ彼は *scire* を用いずして *obscuro* を用いたのであり、それは明かに *to ob-scuro* であって、ディルスの解するように、それを目的としてではないにしてもそれについて考えるところのもの、即ち思惟の対象でなければならぬ。パルメニデスのこの断片は「考えることとその対象の存在とが一であることを主張したものであるというのがタランの説であり、恐らくそれは最もパルメニデスの真意に近いものであったであろう。考えるということは唯そういう作用がそこにあることではない、考えるのは何かを考えることであり、何ごとかについて考えることである。何ものをも考えない考えということとは自己矛盾であるのみでなく事実としてあり得ぬことである。考える作用に対しては何ものかがなければならぬ。それは作用とは異った或るものでなければならぬ。それは考えることに対して考えられるものである。考えるとはそれについて (*ob- obscuro*) 考えるのである。思惟の存在はこの何ものかを前提することなしには不可能であり、それ故に思惟が存在するのはこの対象の存在することにかかっている、——否一步をすすめていえば「考えることとそれについて考える対象の存在することは同一である」というのがパルメニデスの真意であったのではないか。この解釈は著しく現象学的であり、またそうしたものと非難されそうであるが、しかし断片の之に続く次の言葉が以上の理解を支えてくれるのである。曰く「なぜならそれに於いて言表さるべき存在なしには汝は思惟というものを見出し得

ぬであろうから」(ὁ γὰρ ἀνευ τοῦ εἶναι, ἐν αὐτῷ φησὶν εἶναι, εὐφραίνετο τὸ ποιεῖν。Frag. viii 35)。但しここに於いても *πεφάρτευσεν εἶναι* と「うごと」が問題となり、デイルスは *φάρτευσεν* を *διωμάζειν* と同一の意味にとり、存在は言葉の中に言表わされることよってリアルとなると解しているが、それは必ずしも当を得たものではないであろう。むしろ存在は考えることの対象としてあり、考えるというのは何ものかを考えることであり、有るといふのは考えられたものとしてあることである。もし以上のことが許されるならば、パルメニデスのこの断片は単に漠然として存在と思惟との同一性を主張したのではなく、考えるということと、それについて考えるものの存在することが同一であることを、延いては存在することとそれについて考えることが同一であることを主張したものと解釈しなければならぬ。ものが存在するとはそのものについてそのように考えることである。しかしそれと同時にそのように考えることはものがそれについて考えられるところのものとして存在することである。存在は考えられることなしに存在し得ないとともに、考えることはそれについて考えるものの存在なしには不可能である。かくして存在することと考えることが一となるのである。

存在とはただ現にそこにそうあることではなく、それがそのものとして自己同一性をたもつことである。 *Realität* とは *Identität* であるに外ならなかった、自己同一性とは自己が有らぬものであるよりは有るものであり、他のようにはなくまさにこのようにあるところのものである。 *Existence* は *ex-sistere* であり、どこからか由って来るべきものであり、何ものかとしてそこにあるべく定められたものであるが、にも拘らずものはものとしてあることによつてそれ自らに有るものとなる。パルメニデスの存在は凡ゆる存在の仕方に先立って存在するものであるが、それにも拘らず事物は自己同一性をもつことなしには存在することができない。そして事物について自己同一性を確立するものは思惟であるに外ならなかった。考えるとはただ作用することではなく、何ものかを考える作用であり何ものかについて何ごとかを考えることである。事物は考えられた事物であることよつて自己の同一性を確保しそして存在す

るのである。

## 二

以上の如くパルメニデスに於いては「もの」はまず或るものとして規定せられ、或るものは必ず有るものとして捉えられた。有ることなきものは何ものでもなく、従って何ものとも考えられ得ない。探求の道はものを有るものとして把握することから始まらねばならぬが故に存在はあらゆるものの出発であり、そして凡てのものは存在であるべきが故に我々の帰着するところもまた存在でなければならなかった。存在は真理の探求に当って出発であるとともに帰着でなければならなかったのである。これはものを「全体」として、又は「一なるもの」としてとらえることであり、プラトンのパルメニデス観もそこにあつたようであるが(Chermiss)、『しかしパルメニデスの立場は決して「一なるもの」ではなく、何よりも先ず「存在」に置かれていた。μὲν ἄραよりも μὲν αἴτιονを重視することはプラトンをへてプロティノスに至る新プラトン派の解釈に外ならぬであろう。またテオフラストスの解釈——パルメニデスの存在は物質的であるというのもアリストテレスの解釈をうけついでものであつて必ずしもパルメニデスについての正当なる理解とはいへぬであろう。パルメニデスにとっては何ものも必ずしも「物」ではない、それは物であるよりも、或は物である前に既に「有るもの」であり、即ち存在でなければならなかった。ものを物質的に見ることはむしろメリッスス(Melissus)に帰せらるべきであつて、パルメニデスにはなかつた筈である。物と者とを通じてあらわれるあらゆるものの有ることが、即ちものものたる所以をなすことがパルメニデスによって説かれたのである。

紀元前五世紀の頃に於いてこのような徹底した立場に立ったというのは驚くべきことであり、ミレトスを中心とする多くの自然哲学者の間にあつて、このような主張のなされたことはさらに瞠目に値することであろう。或は水を以て(Thales) 或は空気を(Anaximenes) 又は火を以て(Heraclitus) 宇宙の本体とした人々の間にあつて水といえ

ども一つのものであり火といつても或ものであるからして凡ては有るものであり、即ち存在であるべきことを主張したのは何という徹底さであろう。水といつてもその他に火があり、それ故に火や水や空気や土を合せて宇宙の元素とすることは (Empedocles) 常識ある人の折衷にすぎなからう。これらが何故に四に限られねばならぬかの理由を見出し得ぬからして無限に多くのアトムを設定することも (Democritus) 要するに此の種の思想の延長であるにしかすぎない。哲学の立場はこれらの素朴を打破し常識を越えるところに初めて見出され得る。古代ギリシアに於いて哲学者の名に値する最初の人はエレアの Parmenides であり、又はあるべきであった。爾來たえず哲学の中心問題となつた「存在」の学は彼によつて初めて発見せられたらうべきであろう。

しかしながら我々はそれにつづいて直ちに問わねばならぬ。さて然らば存在とは何であるか、存在とは有ることであるが、あるものの有ることとは果して何であるか。この問いに対しては Parmenides からは何らの答えもきくことができない。存在は彼によつて発見せられたがそれが何であるかは Parmenides によつてあからさまには語られなかつた。しかし我々は当然彼によつて答えられるであろう一つの答えを先取することができる。それは「存在とは存在である」という答えである。これは単に我々の臆測ではなく、Parmenides の立場からは当然に答えられるべきものであり、最も徹底的な彼の立場からはこれより外に答えようもない筈である。ものを他のものとしてではなく、それ自らとして、それ自らによつて答えようとするとき、このように答えるより外に仕方がないであろうからである。

存在とは何であるか、存在とは存在である。世にこれほど明晰にして当然なことはないであろう。それは余りに明晰であるが故に殆ど自明的であり、言うまでもないことであり、そう答えられても殆ど何ごとも答えられなかつた。等しい、それは単なる語の反復にすぎぬではないか。そのような答えの堂々さに比例して何という空しさであろう、世の嘲笑をうけるかもしれない。然しこの答は単なる言語の反復ではなく況んや無意味な空言ではないのである。それはまさに Parmenides の立場にふさわしく、それ故に彼の思想を正しく表明したものであることは、最初に引用され

た彼の語句——即ちそこから出発したところに常に還ってくるという彼の言葉に最もふさわしいものなのである。存在の概念はあらゆるもの出發であるとともに帰着でもある。存在とは何であるかは要するに存在によって、その中にそれ自らに於いて答えられるより外にはない。存在は存在である、——かく考えかく言うことによってのみ存在はそれ自らとして定義せられ得るからである。

それのみではない、この命題は論理の最初にして第一なる原理でもあった。「存在は存在である」というのはAはAであるということである、即ち同一の原理 (Law of Identity) を言表したものに外ならない。そして同一の原理は人間の思维の第一にして最初なる方則である。それはそれ故に論理の第一原則をなす。思维の法則が即ち論理であるとすれば論理的なるものを発見した最初の人はバルメニデスであったといわれねばならない。彼の第一の発見は「存在」であるが存在とは単なる概念ではなく、ものが有るということである。有るとはそこに現に有ることであるが、或るものの有ることは単に物の現存を認めるだけではなく、そのものの、そのように有ることを認識することで行なければならぬ。存在は単にものの属性ではなくものの解明である。ものは或るものとして有り、何ものかとして解明せられ、有ることが或るものを開示するのである。こととは事柄でありそれによってのみ物は有るものとなり乃至は或るものとなり得るのである。それは単なる実体でなくコブラであり有ることによって或るものは一つのものとなり得るのである。ものに、ことを加えたものが即ち事物であった。事物は単なる Ding ではなく Sache であり Tassache であり Sachverhalt 行なければならぬ。我々が存在として取扱うのは専らにしてこの事物である。人々が生きたるものとして交渉するのはひたすらにこの意味の「事物」即ちものにして、ことであり、事にして物であるところのものでなければならぬ。我々が事物を知るのは外界に存在する物を取り入れるのではなく、事物についてそれが何であるかを知るのである。事物はそれ自ら一つのものであるが事物についてその何であるかを知ることが即ちそれを認識する所以である。或るものが有るということによって規定されることが即ちそれを知る所以であった。存在が

存在であるということはそれ故に事物が我々によって知られるということであり即ち論理の第一歩であったのである。それは単に語の反復ではなく、況んや無意味な繰言ではない、それはまさに認識の第一歩であり、それ故に思惟の第一原則であるべきであった。龐大な論理学の歴史を書いたプラントルも論理学の最初の建設者としてパルメニデス及びエレアの学徒を掲げている (Prantle; *Geschichte der Logik*, Bd. I)。まことに論理学の名に値するものはエレア学派によって拓かれたといつて差支えないであらう。このことはこの派の発展をたどることによって更に明かにせられ得るところである。

パルメニデスの直接の弟子はゾエーノン (Zeno) であった。彼は詭弁論の創始者であり運動を徹底的に否定した人であるがその論拠はどこにあったのであるか、運動とはものが或る所に有つて同時に無いということである。運動は存在と非存在との二つによって成立する、そしてこれは明かに矛盾である。エレア派の主張によれば存在は存在し、存在しないものは存在しない (同一の原理)。しかるに運動は存在すると共に (同時に) 存在しないものであるから明かに矛盾したものである。この矛盾を犯すことなしには運動はあり得ぬ、運動はこの矛盾を含むが故に論理的には成立しない、それ故に運動はない。——この論理は運動を論理的に証明せんとするものであり、それが如何に立派に証明せられても依然として水は流れ風は吹く。この証明はそれ故に詭弁である。しかし我々がゾエーノンに於いて見出しそして尊重するのはこの詭弁ではなく、矛盾の原則である。論理の第二の法則即ち矛盾律はゾエーノンによって発見せられた、そして彼がパルメニデスの直接の弟子であったように、矛盾の原理は同一律から直ちに発展したものであるということである。これは人間の思惟の歴史に於いて一つの大なる収穫であり、ゾエーノンを詭弁論者としてではなく、論理の第二の原則の発見者として思い起すべきことを我々に迫るものである。これらの歴史的なる事情を精査することなしにも、このことだけはここに明記されてよいであらう。論理の第一原則である同一律はパルメニデスによって、第二の矛盾律はゾエーノンによって発見せられたことはエレア学派が論理学に対して如何に大なる寄与

をなしたかを十分に語るものであって、恐らくそれは存在の概念の発見と並んで、否それにもまして大なる功績であるといつて差支えない。ところで論理の第三法則、即ち排中律 (Law of Excluded Middle) は何の時代にもまして大なる功績で発見せられたか。しかしこの第三法則はアリストテレスの中に屢々引用せられてゐるから既にこの時代にはよく知られた法則であつたにちがいない。実を言えばこの法則は第一、第二の法則から自ら発展したものであり、特別に新しい発見を呼称するまでもなく、少しく考慮をめぐらせば容易に前二法則から導出し得られるものであるが、しかしそれ故に之を単なる派生的なものとする事はできない。もしそういうならば矛盾律も同一律から派生されたものであつて事情は同様なのである。論理の三法則は実は一つの原理であつて互に関連し、一から他を導出することは論理の当然であり、さして困難なことではない。パルメニデスからゾエーノンが出たということも歴史の事実であるのみでなく論理の必然でもあつたわけである。彼はエレア学派の忠実な信奉者であつたことから自ら矛盾律を表面に押し出したとも見ることもできよう。第三の排中律はまさしくそのような事情のもとに発見されたものであろうが、その故にこれを一つの原理として打立てることを拒む理由とはならぬのである。

論理の根本的な原則は同一律と矛盾律と排中律との三者によつて一応は完成した、それは恰も運動の法則として三つの原理がニュートンによつて創唱せられたことと呼応するものであろう。古典物理学がニュートンの運動の三法則によつて支配せられたように、形式論理学はアリストテレスの三法則によつて大凡大成せられた。現代の物理学がニュートンの法則によつて十分に成立し得ないように現代の哲学もアリストテレスの形式論理学のみでは満足され得ないことはいうまでもないが、それにも拘らず古典物理学なしには現代物理学が生れ出で得なかつたように、現代の哲学も形式論理学を見失うことは許されない。現代の哲学は余りに多くこのことを忘れ去らんとしている。

アリストテレスの論理学は殆ど完成した組織をもって紀元前の遠き昔から長き中世期を経て現代に到るまでヨーロッパの思想界を支配して来た。否それは啻に欧州の学界をのみでなく、苟くも人間が人間である限り、東西や年代の区別に拘らず人間の思想を等しくそして遍く支配すべきものであっただろう。これは一つの驚くべきことであるが、さらに新しい驚きを加えることは、長きヨーロッパの思想の歴史を通じて、それが一つの独自の哲学であり、思想の歴史を劃すべき新しき哲学の立場を創始した人又は時代は大凡アリストテレスの論理の法則を打破し、変革したものであるということである。これは思想の歴史に対する私の見方であり、一般の承認を得がたいものであるかもしれぬが、少くとも学問の方法としての論理に關係してはそのような見方が許され得るであろうことを期待せしめる理由があるのである。

先ず第一法則から始めよう。同一律はAはAであるということであり、それがそうであるからしてAの存在が確保せられるのであるが、それはAの何たるかを開示し得るものではない、高々その有することを確立はしてもその何であるかを開示することはできない。それは存在の存在性を示しはしてもその具体性を明示するものではない。論理的に言つてAがAであることほど明晰であつて誤りなきものはないであろう。Aはそれ自らであつて他のものではなく、そのものとしてあつて無きものではないからしてその自己同一性ほど自明的なものはない。存在とは何であるか、存在は存在であるということほど明晰なものはない。しかし明晰にして判明なるものは必ずしも真理ではない。少くとも自明的なものは必ずしも確實なものではありえない。この確かさは論理的にはあつても眞実にはない。間違ないということは直ちに真であるということではなかつたのである。AがAであることは単に語の繰返しではないにしても、それはただAの概念の分析にしかすぎぬであろう。そして分析判断は概念を明晰にするものではあつても知識を充実するものではなかつた。判断は單なる分析判断ではなくして綜合判断でなければならぬ。——かく言えば人々は直ちにカントを思い起すであろう。カントの認識論はまさにかくの如く主張し恰もそのような哲学としてあつ

たからである。彼の学説が認識論であつて単なる論理学でないこともこの所に理由をもっている。アリストテレスの論理学は長き中期をへてカントに到るまで一步も進歩しなかつた——たとえ一步も退歩しなかつたとはいへ——それがカントの自負であつた、しかも我々がこの自負を率直に認めざるを得ないのは以上の理由からしてであつた。カントはアリストテレス以来の形式論理学を批判して——カントの批判主義はここに始まる——一つの新しい論理学をうち立てた、それが先驗的論理学 (Transzendente Logik) であることは余りにも有名であろう。しかしこの新しい論理学が何であり、何を論理学の歴史の中にもたらしたかは周密に研究せらるべき問題であるが、とにかく先驗的論理学がアリストテレスの論理的立場の一つの変革であることは明かであり、そしてこの変革の骨子は第一法則の批判に出發することだけはたしかに明言し得ることなのである。それは単なる変革ではなく況んや単なる打破ではなく、語の正しい意味に於いて「批判」であつた。AはAであるという同一律は正しく確かできえあるが、それは必然であつても十分ではない。大凡ものの成立は必要にして且つ十分でなければならぬ。認識の成立はAがAであるということによつてではなく、AがBであるということによつて始めて可能となる。前者は分析であるが後者は綜合判断である。認識は先驗的にして綜合的なる判断でなければならぬ。単に綜合的であるのみでなく、先驗的という点にカントの認識論の一つの重点がおかれているが、「Transzendental」というのは依然として形容詞であつて、主要なことは「綜合」に置かれてゐることを忘れてはならぬ。synthetischとは判断の一つの性質ではなく、その本質と見るべきであろう。判断はそもそも綜合的でなければならぬ。単なる分析判断は判断の判断たる所以のものを欠いてゐる。判断は綜合的にして且つアプリアリでなければならぬ。カントの「純理批判」はこのような判断が如何にして成立し、何故に可能であるかを論究せんとしたものであるが詳論は後に譲つて先づ以上の問題点を指摘することに止めよう。

論理の第二法則を逆転したものは弁証法的論理 (Dialektische Logik) であり、それがヘーゲルによつて大成せられたことは余りにも有名であろう。私はここに「逆転」という語を用いた。それは単なる変革ではなく、況んや「批判」

ではなく、まさに逆転であったのである。

弁証法的論理とは何であるか、その性格、構造、就中その論理性等々についてはまさに我々の研究すべき重要な課題であるが、先ずこの序論の予想として次の如く規定してかかろう。それは形式論理の第二法則即ち矛盾律を逆転した論理的立場であるということである。矛盾律は矛盾を排除する法則であり、矛盾のあるところに真理は成立しない、それが真であるためには何らの矛盾を許さないことであり、形式論理における矛盾律は正しく無矛盾の原理であった。ところが弁証法的論理は逆に矛盾を許容するのみでなく、却って矛盾性を論理的な性格としているのである。存在と非存在とは矛盾するが故にこの二からなる「運動」はエレア派によって厳しく排斥せられた。しかるにこの矛盾なしには存在はあり得ぬ。矛盾をふくむことによって存在は存在する。静的な存在でなくして動的な、発展するところの存在となる。それが運動であった。存在を静的な存在として見るか運動としてとらえるかによってそれらを支持する論理が根本的に異らざるを得ぬことは明らかである。弁証法が運動の論理であり、無矛盾性がではなく、有矛盾性が論理性をなすことはむしろ初歩の理解に属するであろう。この故に古くはヘラクレイトス (Heraclitus) がパルメニデスに対抗し、近代に於いてヘーゲルの弁証法はカントの先験的論理学に反抗する。このような理解はヘーゲルの論理を浅薄な表式に於いてとらえたものにすぎないが、序論の問題性を開示するものとして少くとも大なる誤謬に陥ってはいないであろう。

ヨーロッパの論理学はカントとヘーゲルによって大成せられ、そして現代に到るまでそれ以外にまたはそれ以上に新しい立場が創設せられたとは思われない、カントの先験的論理を第一の論理学と言うことが許されるならばヘーゲルの弁証法論理は第二の論理学と名づけ得るであろう。そしてヨーロッパの論理学はこの二者によって果成せられたとすればその外に、又はそれ以上に新しき立場は今の所見出すに由ないようである。少くともそれを見出すことは至難のようである。そのように断言することは啻に我々の肆意によるのではなく、カントの立場が同一律の批判であり、

ヘーゲルの論理は矛盾律の逆転であることよって達成せられ得る。それは形式論理の第一と第二の法則の変革であり、単に偶然的な変革ではなく、論理の発展としてまさに又は必ず然るべき発展であったからしてである。カントとヘーゲルとの出生は歴史的事実としては偶然であるかしかないが、彼等の作りあげた哲学の体系は決して偶然的な学説ではなかった、それらが苟しくも学的体系であるからには人間の思想の発展として歴史上に確乎たる位置と意義とを有するものでなければならぬ。神はカントとヘーゲルという二人の人間を創ったが、彼等の思想的業績は夫なる個人に特有なる所産であると同時に、汎く人間の思想体系の内なる発展でなければならぬ。いなそれらは次なる発展(Entwicklung)であるよりも人間の思想一般の展開(Entfaltung)であるといわれるべきであるかもしれない。思想の歴史の発展はただ様々なる思想が次々に継起するというのではなく、前にあった思想は次に来るべき思想の前駆であり、次に生れる思想家は先人の批判者であると共にその正しき後継者でもなければならぬ。伝承者は常に批判に先き立たれ、後継者の致すべきは却って先人を超克するところにこそあるべきであるが、それにも拘らずこれらを買いて一脈の通ずるものがなくてはならない。事実としての歴史にとってはそのような隠された存在(abstract)が語られることは愚かしいが単なる歴史ではなく歴史学には、——政治や事実の歴史ではなく思想の歴史に於いては、種々なる発展よりも一つのものの展開が語られることは不都合ではない、——否むしろそうであることが正しく、必然であるとさえ思われるのである。東洋には東洋の思想があり、西洋には勿論ギリシアから現代のアメリカに至るまでの多くの思想があり、これらはそれぞれの体系をなしている。そしてこれらは国土と世代とに於いて多様に——実に複雑なる多様性に於いて展開しているが、それらはそれぞれの類型を有するのみでなく諸類型はまた一つの体系をなすものでなければならぬ。そうでなければ思想の歴史といったものが成立し得ない筈であろうから人間の思想は無限に異りながら等しく人間であるからには尚何らかの一致するものがなければならぬ。そうでなければ人々が互に異なるということさえも理解し得られないであろうから。観念論と唯物論とはそれなら思想の類型であ

る。これらは互に異なるのみでなく互に相容れぬまでに反対している。しかしそれにも拘らず汎く人間の思想としては互に見知らぬ他者であることができぬ。互に他者であることさえ尚一つのものの体系の中になければならない。少くともこれらは一から他なるものへの変革または発展であるよりも一なるものの種々なる展開であるといわるべきであるからである。

論理の三法則はこのような一なるものの展相であり、それらはそれぞれに於いて異りながら尚一つの原則の展開に外ならぬが、人間の思想の発展は意外にもこれらの批判乃至は反逆によって進められた。同一律の批判から出発したものはカントの認識論であるが、矛盾律の逆転とするものはヘーゲルの弁証法である。ところが第三の排中律を逆転したものは果して何であるか、寡聞にしてそのような哲学を私はヨーロッパに於いて見出すことができない。そのような逆転を敢えて試みた人は未だかつて西洋哲学の歴史の中に発見し得ぬのである。西欧の哲学の主流はプラトンからカントに到り、ヘーゲルに於いて完成した、——そう見るのが私の見方であるよりもヘーゲル自らにそう考へ、のみならず高らかに自負したところである。それはヘーゲル以後に何の哲学も起らなかったということではなく、哲学の新しい立場は矛盾律の逆転によって一応はその任務が終ったと考えられたためでなかったか。豈にはからんやそこには未だ一つの残された立場がある。見忘れられ見失われた一つの哲学があるべきであった。それは第三の排中律の逆転によってまさに起るべき一つの新しい立場である。それはそれ故にまさに第三の論理とよばれるべきものであった。論理の第三の法則、即ち排中律の逆転を土台とするが故にそれはまた第三の哲学とも名づけ得られるであろう。しかし我々はこのような哲学的立場を西欧のいっこ又は何の時代に於ても見出すことができない、却って東洋の、殊にイントの大乗仏教に於いて、就中ナーガールジュナの教学について見出し得るものではないかと思う。かくいうことが何を意味するか、またそのような主張が果して許され得るかどうかは今後の問題であるが、ただ一つ今にして確言し得ることはそのように考えることによって人間の思想の原則たる論理学の体系が完成せられると共に、西洋と東

洋との文化の交流、否この両者が夫々に異りながらしかも一つの世界文化の中に正しく位置づけられ、相依って一つの統一的文化を構成し得ることを予期せしめるであらうことである。

それは極めて困難な恐らくは不可能な仕事であるかもしれないが、尚もこの予望をすてきれないのは一方に現実の歴史的事情によることであるとともに、原理的にも人間の思想の体系、即ち論理の組織を追求して止み得ない、我々の志念に起因しているのである。

(筆者、竜谷大学文学部〔哲学〕教授)

---

---

## THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

---

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.*

### **The third logic**

by Tokuryû Yamauchi

Parmenides was the first philosopher who found the concept of Being and the first law of logic, namely the law of Identity. The Second law of logic, the law of Contradiction, is to be attributed to his disciple Zeno. We do not know the origin of the third law, namely the law of the Excluded Middle but these three laws were said to be only ramifications of one fundamental principle of human thinking and were systematized by Aristotle.

According to my opinion, in spite of the splendid development of European philosophy, new standpoints of thought have always originated through the destruction or renovation of one of these three laws.

Kant has criticized the law of Identity and established his transcendental logic. Dialectic method of Hegel was just the reverse way of the thinking of the law of Contradiction.

But as far as I know there is no philosopher in the long history of European thought who has converted the law of Excluded Middle.

To my astonishment this great enterprise was accomplished by the Indian philosopher Nāgārjuna. Is it really so and how is it performed? That is the central theme of this essay.